

◆アジアリエゾン担当

佐藤誠

東京工業大学

アジアリエゾンでは、主にアジアの国々へ向けての本会議開催の広報活動を行った。

基本的な広報活動は、アジア各国の主要なVR研究者に開催プログラムを送付して、近隣への広報を依頼することである。実際に開催プログラムを送付した国は、韓国、台湾、中国、香港、シンガポールおよびタイである。

昨年10月に台北の国立台湾大学において開催されたICAT2000においても開催プログラムを配布して本会議への参加を促した。なお、欧州地区への広報は、スイスジュネーブ大学のNadia Magnenat-Thalmann教授に全面的に依頼をして、開催プログラムを送付した。

両地区からの本会議への参加者は、それぞれアジア地区より約25名、欧州地区より約70名であった。特に目立った参加国はアジア地区では韓国(17名)、欧州地区ではドイツ(18名)であった。韓国ではVR研究への関心が高く、また多くの研究者がVRシステムの開発に携わっていることがわかる。一方では、台湾および中国からの参加者が比較的少なかったのが残念であった。欧州からは各国より満遍なく参加者がおり、このことから、Thalmann教授の協力に感謝をしたい。

◆会計担当

池井寧

東京都立科学技術大学

IEEE-VR2001の組織・実行委員会の中で、会計関連の業務を担当させて頂いた。会計担当は、general chairとともに会議の計画書(TMRF)を提出する仕事があり、早期の準備段階から予算検討を含む作業を行った。本国際会議は、IEEEが主催してこれまで7回米国において開催されてきたものであるが、米国内での会議運営と予算面の構成が異なる部分があるため、TMRFの作成は注意を要する仕事であった。また、会議の会場となるパシフィコ横浜は、大変立派な会議場であり、立地も良いため、会場費の負担がかなり大きいことが懸念材料であった。参加者を多数集めることができれば問題は無いが、想定する参加者規模によって、収支は大きく変動するため、それが誠に頭の痛い問題であった。参加者が少なかった場合に

備えて、募金を募ることとし、寄付による支援を含めて、会議参加者に最大のサービスを提供できることを目標とした。幸い、いくつかの財団と多数の企業が本会議の趣旨に賛同していただけることとなり、十分な援助を得ることができた。参加者数もほぼ目標を達成することができ、健全な収支決算書を提出することができそうである。ご協力を賜った支援団体の皆様に厚くお礼申し上げる次第である。

◆Session Chair 報告

Session 1: Haptic Display

岩田洋夫 (筑波大学)

本セッションは力覚ディスプレイに関する論文1件と皮膚感覚ディスプレイに関する論文2件で構成されていた。筆者はGrigore Burdea氏とともに座長を務めた。Burdea氏はhapticsの世界ではオピニオンリーダーの一人である。本セッションの座長を共同で行うにあたり、氏と打ち合わせた結果、筆者が全体の進行を行い彼がディスカッションの舵取りを行うという役割分担にした。3つの論文ともにフロアから活発な発言があり、座長も議論に加わって盛況なセッションにすることができたと思う。また、本セッションで2番目に発表した奈良高明氏はBest Paper Awardを受賞した。日本人の若手発表者には英語力が不足して質疑応答が成立しないケースが非常に多いのであるが、奈良氏の場合は立派にこなしていたことが特筆に値すると思う。

Session 2: Shared Virtual World

中津良平 (株)ATR 知能映像通信研究所)

セッション2は"Shared Virtual World"と題したセッションで、仮想空間を介した、協調作業・会議などに関する4件の発表があった。最初の発表は東大の國田氏らによるもので、テレビ会議等での使用に向けた眼鏡不要型の立体視に関するものである。2番目はGeneva大のKshirsangarらによるもので、インターネットを介して映像通信を行うために、本人の顔や音声を効率よく符号化・復元する方式に関するものである。3番目は岐阜MVLセンターの小木らによるもので、CAVEなどを用いたテレビ会議において、通信相手を3次元映像として再現する方式に関するものである。4番目はVRACのHartlingらによるもので、協調作業用開発されたOctopusと呼ばれるプラットフォームに関するものである。聴衆は約100人であり、各発表とも熱心な討論が繰り広げられた。